

古文書倶楽部

新版 江戸道中廻り

嘉永六年夏
八月中旬編之
高克齋
彫工 久保田三丁目

【発行】

秋田県公文書館

古文書班

2008.2

第21号

今月のおすすめ資料

新版江戸道中廻り(AH292 3 1)

江戸時代も後期になると、全国的に庶民が社寺参詣や湯治を目的に旅をするようになります。いわゆる「お伊勢参り」と言われた伊勢神宮参詣が有名です。しかし結局のところ旅は物見遊山。名目はどうあれ、旅は庶民の娯楽になっていきました。

この旅行ブームを象徴する資料が、今回紹介する木版の道中絵図で、言うならば秋田〜江戸間のガイドマップです。発行は嘉永六年(一八五三)八月中旬。絵は克齋、彫工は久保田三丁目川端・板屋久治とあります。幕末期とはいえ、秋田に出版を生業とする版元があったことはこれまで知られておらず、その意味でもこの資料は貴重です。

絵図の中の地名に囲みがついている所やのついている所は一里塚があった所だそうです。

机上旅行のみならず双六としても十分に楽しめたことは間違いない。昔日の秋田の生活風景をお楽しみください。

(畑中康博)



玉川橋なき時代の神宮寺舟渡の様子



番所での出入国審査はお白州?

横手 蛇ノ崎橋の風景

茶屋には美しき娘がいたのでしょ!

戊辰戦争一四〇年目の真実
東山文庫「戊辰勤王懐旧談」を読む

昭和三年(一九二八)、戊辰戦争から六十年、干支が一回りして再び戊辰の年。ちまたでは「昭和維新」が叫ばれるこの年、秋田魁新聞では戊辰戦争に参加したお年寄りたちの証言を集め、連載しています。

これを秋田の歴史家、東山多三郎はスクラップブックに貼り付け「戊辰勤王懐旧談」と名前を付けました(AH212・1 156)。

今年(一九二八)は戊辰戦争から百四十年。戊辰戦争を研究する糸口として、戦火をくぐり抜けた人たちの体験談を見るのはどうでしょうか？

ここでは、その一端を紹介します。

永井時之助翁(七十六歳 昭和三年時点)の談話
・吉川忠行先生は中央より銃器製造の鍛冶工を連れてきてこれに従事させ、自身はオランダ兵法を講義されていた。

中村善兵衛翁(七十六歳)の談話

・戊辰戦争で秋田藩が負け込んだ時、城内の家老はブルブル震えるだけだった。

・砲術館総裁の吉川忠行先生の砲術隊は、夷狄の部隊と見なされたので、先生は「犬」と罵られ、板塀に投石された。砲術館に学ぶ我々は「犬猫のマネをするか」と馬鹿呼ばわりされた。

畑江道知翁(七十六歳)の談話

・秋田製の大砲は、数発撃つと砲身にカスがたまり大変だった。

吉川忠行率いる秋田藩砲術隊は戊辰戦争で大活躍したとされます。しかし元隊員が「自分たちは差別されていた」と語る事実は、明治以来忘れられてきたことではないでしょうか。

体験談はこの他にもまだまだありますが、次の言葉がとりわけ印象的です。

館 直吉翁(八十八歳)の談話

・戊辰の役を書いた本がありますが、あれは大抵ウソです。戦のことなどは実際に出た人でさえ、自分のやったことすらわからないものです。

ここで紹介した東山文庫「戊辰勤王懐旧談」は、閲覧室に複製本があります。カウンタ―での請求なしで手にとって見るができます。どうぞ御利用ください。

(畑中康博)

古文書こぼれ話

北国大名佐竹氏の残雪期における参勤交代

雪は小説では情緒豊かな風情を、小正月行事では幽玄な世界を演出する反面、日常生活では交通マヒなどの雪害をもたらします。

今回は、ブルドーザーもダンブもなかった江戸時代の残雪期における参勤交代の様子を、当館所蔵資料である「国典類抄」より紹介しまし

よう。

享保七年(一七二二)、八代將軍徳川吉宗は財政難打開のため、諸国の大名に上米を命じ、その代償として大名の江戸在府期間を一年から半年へと緩和しました。これによって佐竹氏には三月参勤、九月御暇といった参勤割り振りが命ぜられます。残雪多き三月の参勤、果たして五百人前後の人馬と荷物の移動がスムーズに行くかどうか心配の種となりました。

藩では残雪期を避けたいことから、享保九年の参勤について発駕を遅らせるための請願をしますが、回答は「江戸参着はやむを得ない事情があれば遅れても良いが、発駕を遅らせることは罷りならぬ」というものでした。旧暦とはいえ、三月の街道は残雪に覆われ、雄勝峠越えでは馬の足が雪に食い込み行列どころではありません。といったわけで、結果として江戸に遅れて到着しました。

ところが、この江戸参着の遅延がまた厄介でした。例えば享保十三年(一七二八)は將軍吉宗の日光参詣と鉢合わせになるところから、宇都宮は通過できない。そこで水戸街道経由で江戸入りをするようになりました。しかし水戸は佐竹氏にとっては旧領の上、徳川御三家である水戸家の領国です。その気遣いたるや察するにあまりあります。無事に江戸入りが済んだ五月、御礼として藩主の佐竹義峰は水戸宰相徳川宗堯に馬を献上しています。

春は名のみ風の寒さならぬ、残雪の一件であります。

(渡部紘一)